

◆ 映画上映会

『ローマ法王になる日まで』上映会ごあいさつ

西 原 廉 太

編集部註

2019年初夏ローマ教皇庁が「フランシスコ教皇、11月下旬訪日」の予定を発表した。ラテンアメリカ研究所では新教皇誕生の8ヵ月後、既に教え子のJ. アイダル上智大学教授をお招きして講演会を開いており、今回は趣向を変え、日本公開済み(2017年)の伝記映画『ローマ法王になる日まで』の上映会を企画した。研究所の通常企画とは異なり平日11月22日(金)の夕刻と開催日程を定めておいたところ、偶然にも訪日の前夜となり、学外からはもちろん学内からも学生・教職員多数の関心を集めた。

また本学大学院キリスト教学研究科に後援を打診したところ快諾を得られ、教皇と面会経験のある同研究科西原教授より当日上映前のご挨拶を頂けたので、ここに再録する。

なお研究所としては従前より「法王」ではなく「教皇」の語を用いてきた。上映作品邦題には配給元が「法王」を用いたためこれを踏襲したが、このたびの訪日を機に日本外務省も漸く「法王」「法王庁」の使用をやめ「教皇」「教皇庁」に改めると正式発表した。

上映映画

『ローマ法王になる日まで』 原題：Chiamatemi Francesco - Il Papa della gente

2015年／イタリア／スペイン語（日本語字幕）／113分／ダニエーレ・ルケッティ監督

ごあいさつ

ご紹介ありがとうございます。みなさま映画を楽しみにされてお越しなのですが、その前座として20分ほどお話をさせていただく機会を与えてくださいました。どうぞよろしくお願いいたします。

世界教会協議会、World Council of Churches (WCC) という、この地上に存在する古代の教会からの連続性を持つ、カトリック教会を除くほぼすべてのキリスト教会が加盟している世界ネットワークがあります。この世界教会協議会には、立教を創設した聖公会（英国国教会系教会）やルーテル教会、改革派・長老派教会、メソジスト教会、バプテスト教会、またギリシャ正教会、ロシア正教会等の東方正教会、また、オリエンタル諸正教会が加盟しており、すべての加盟教会の信徒数を合わせますと約5億6000万人になります。私は、聖公会の代表として、世界から150名選出されて構成している中央委員会の中央委員をしています。昨2018年の6月に、世界教会協議会の創立70周年の記念式典が、スイス・ジュネーブで開催されたのですが、その際に、ローマ

教皇フランシスコがメインゲストとして、私たちを公式訪問してくださいました。その時に、私も初めて、フランシスコ教皇とお会いしたのですが、大変気さくな方で、私が、日本の聖公会のメンバーであると自己紹介しましたところ、「あー日本にも聖公会があるのですか？」と笑って答えてくださいました。その際、フランシスコ教皇は、私たちのために講演をしてくださったのですが、それは英語でもスペイン語でもなく、イタリア語でした。フランシスコ教皇の本名は、ホルヘ・マリオ・ベルゴリオとおっしゃいますが、ご両親がイタリア系移民の方であったこともあり、アルゼンチンの生まれではありますが、イタリア語も使い慣れておられたとのことでした。

さて、ローマ教皇フランシスコが、いよいよ、明日11月23日、来日されます。24日朝に長崎へ向かい、爆心地公園で「核兵器に関するメッセージ」を伝えた後、日本二十六聖人記念碑を訪問。その後、長崎県営野球場でミサ。同日夕には広島へ移動し、平和記念公園で「平和のための集い」を行い、25日は東京で開かれる「東日本大震災被災者との集い」に参加した後、天皇と会見。東京カテドラル聖マリア大聖堂で開かれる「青年との集い」に参加し、東京ドームでミサ。その後、首相官邸で安倍晋三首相と会談、26日はイエズス会員とのプライベートなミサを行い、最後に上智大学を訪れ、正午前に羽田空港からローマへの帰途に着くという、来月で83歳になられる教皇にとっては、大変ハードなスケジュールです。教皇来日は1981年の故ヨハネ・パウロ2世以来、38年ぶり2度目となります。私も、25日の東京ドームでのミサにはお招きいただいているのですが、日本のカトリック中央協議会の公式ウェブサイトには、教皇来日特設サイトが作られ、「ローマ教皇来日記念オフィシャルグッズ」のページもあり、記念のキャップやTシャツ、マフラータオルなどが販売されていて、ロックスターも真っ青の展開です。

ローマ教皇は、ローマ・カトリック教会、約13億人を教え導く存在としてありますが、宗教界のみならず、世界の政治、社会、文化に対して、ローマ教皇が持つその世界的な影響力は計り知れません。世界でも「屈指の外交官」としての顔を持つとも言われています。実際、ローマ教皇は、バチカンの国家元首として、バチカンを頻繁に訪れる各国首脳と会見する一方で、貧困、環境、移民難民、平和、非核化など人類共通の課題につき、たえず警鐘を鳴らす「国際社会の良心」であるともされています。立教を創設した聖公会の中心は、カンタベリー大主教ですが、カンタベリー大主教も、英国という国家における順位は、国王、カンタベリー大主教、首相ということでナンバー・ツーです。例えば、2009年に先代のローワン・ウィリアムズ大主教が来日され、立教大学も訪問された際も、英国大使館が関わる国家的VIPではあったのですが、もちろん今回のローマ教皇来日のような話題にはなりません。

アルゼンチンのカトリック教会大司教であった、ホルヘ・マリオ・ベルゴリオ大司教は、2013年3月に第266代ローマ教皇（正確にはローマ主教、Bishop of Rome）として教皇座に着座されました。史上初のアメリカ大陸（ラテンアメリカ）出身教皇、史上初のイエズス会出身教皇です。質素で謙虚、庶民感覚に溢れた方というエピソードは多数あります。教皇に選ばれるまで、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスの小さなアパートで、自炊生活をされていました。バスでスラム街を訪問し、貧しい人々のケアをするのが日課でした。英国の新聞、デイリー・テレグラフに載っていた記事によれば、ローマ教皇に選出された後、ブエノスアイレスでいつも新聞を宅配してくれていた新聞販売店店主のダニエル・デル・レグノさんにこう電話をされたそうです。「ダニエ

ルさん、大司教のホルヘです。ローマからかけています。いつも新聞の宅配をありがとうございます。ちょっと長く、ローマにいないといけないことになったので、明日から新聞の宅配を止めてくれますか（笑）。」

私もお世話になっている日本カトリック教会の神学者、森一弘司教は、フランシスコ教皇のブエノスアイレスでの日々を支えていたのは、「スプラנקニゾマイ」(σπλαγγνίζομαι) という聖書の言葉だと言われています。スプラנקニゾマイというのは、日本語の新約聖書においては、イエスの「憐れみ」と訳されている言葉ですが、原語のギリシャ語の本来の意味は、痛んでいたり、苦しんでいたりする人を前にして、自分の腸がちぎれそうに痛むということです。アルゼンチンで、ホルヘ・マリオ・ベルゴリオ大司教と接した経験のあるほぼすべての人々が、彼は、貧しい人々や、困難の内にある人々を徹底的に大切に、寄り添っていたと証言しています。また教皇の神学は、まさしく解放の神学と通じる、現場からの「下からの神学」です。形而上学的な、机上の論理から入る「上からの神学」ではなく、神の真理を知りたいければ、貧しいスラム街の中に入り、そこに生きる人々と共に生活することだ、というのが彼の確信です。大神学者から神学を学ぶのではなく、苦難の内に日々生きる人々の現実に学ぶことの大切さを、フランシスコ教皇は常に語っているのです。

先代の教皇、ベネディクト 16 世は、カトリック教会を代表する大神学者でしたが、きわめて対照的でした。ベネディクト 16 世は、非常に硬い考えを持っておられました。ローマ・カトリック教会は 1962 年から 1965 年にかけて開催された第 2 バチカン公会議で、「開かれたカトリック教会」への変革の歩みをはじめ、それ以来、聖公会をはじめとする他のキリスト教会や、イスラム教やユダヤ教をはじめとする他の宗教との積極的な対話に踏み出しました。ところが、ベネディクト 16 世はヨゼフ・ラッツィンガー枢機卿時代、つまり教皇になるまで、ローマ・カトリック教会の教理を統括する教理省長官をつとめ、その間、『ドミヌス・イエズス』という教理省宣言を公表されました。それは、ほぼ、カトリック教会以外には救いなしと宣言する内容で、第 2 バチカン公会議での開放志向の抑制といった趣きを感じざるを得ないものでした。聖公会も含めて、プロテスタント諸教会に対しては、「教会」(church) という表現も使われず、「教会的な団体」(ecclesial body) と表現されてしまったのです。

ところが、フランシスコ教皇はまったく違う姿勢を示されました。フランシスコ教皇の口癖の一つは、「私たちは閉じてはなりません。閉じていることはキリスト教的ではありません。常に開かれていなければなりません」ということです。フランシスコ教皇の神学を“Bridge Theology” (橋を架ける神学) と評する研究者もいます。それは、移民や難民、社会の周縁に置かれた、marginalized された人々との架け橋でもあり、他のキリスト教会、他の宗教者との架け橋であり、global North と global South の架け橋でもあります。フランシスコ教皇と、世界の聖公会の要であるジャスティン・ウエルビー、現カンタベリー大主教は、すでに二人で何度も会見しています。直近では、まさに先週の 11 月 13 日、バチカンのカーサ・サンタ・マルタ・ゲストハウスで、二人は長時間、親しく会談し、その結果、深刻な紛争が続く南スーダンを、二人が共同で来年の初めに、公式訪問し、紛争解決の糸口を探るという計画に合意しました。英語では、“Joint Pastoral Visit” と言いますが、ローマ教皇とカンタベリー大主教の“Joint Pastoral Visit” は、キリスト教の

歴史においても実に画期的な出来事となります。

教皇フランシスコの来日の意味についても簡単に触れておきたいと思います。今週18日、教皇は来日直前のメッセージを発表されましたが、その中で、今回の訪日のテーマをくすべての命を守るため>とした上で、「人類の歴史において核兵器による破壊が二度と行われないう、皆さんと共に祈ります」と述べ、核兵器の使用は倫理に反すると訴えられました。訪日プログラムには、被爆地の長崎と広島両方が含まれていることにも大きな意味があります。昨年の新年メッセージの中で、長崎の原爆で亡くなった幼い弟を背負ったまま、火葬の順番を直立不動で待つ少年の写真を印刷したカードを全世界の教会に配布するように指示されました。この写真は、米従軍カメラマンのジョー・オダネルさんが撮影されたものです。そのカードの裏には、フランシスコ教皇の署名と共に、「これは戦争が生み出したものである」との言葉が添えられていました。

フランシスコ教皇にとってもう一つの重要な目的が、16世紀にカトリック・イエズス会の宣教師たちが辿り着き、キリスト教を伝え、また苛酷な弾圧の中、300年もの間その信仰を守り続けたキリシタンの地、長崎を訪れることにあることは間違いありません。フランシスコ教皇は、日本の戦国時代に上陸したザビエルやフロイスらイエズス会宣教師と同じイエズス会に属しているのです。そのことの歴史的意味を最も体で感じているのが、長崎のカトリックの人々と言っても過言ではありません。今回のローマ教皇来日準備の総責任を担っておられるカトリック長崎司教区の高見三明大司教と、私は常日頃、親しくさせていただいていますが、高見大司教ご自身が、潜伏キリシタンの末裔です。高見大司教はこう話してくださいました。「長崎のカトリックの人々にとってのローマ教皇来日の意味は特別で、300年もの間、長崎のキリシタンたちは潜伏しながら、遠いローマというところにお住まいというパパさまが、いつか、再びパードレをこの地に送ってくださるという宣教師たちの約束をひたすらに信じて、弾圧と殉教を堪え抜いた。そのパパさまご自身がなんと、この地を訪問してくださる。それは、長崎のカトリックの人々にとっては、論理的には決して説明できない、いわば体がいかんともしがたく疼くような出来事なのです。」

最後に、教皇フランシスコが出された回勅、『ラウダート・シ——共に暮らす家を大切に』の一節をご紹介します、私の拙い話を終えたいと思います。

「貧しい人々の神よ、あなたの目にはかけがえのない、この地球上で見捨てられ、忘れ去られた人々を救い出すため、私たちを助けてください。

世界をむさぼるのではなく、守るために、汚染や破壊ではなく、美の種を蒔くために、私たちのいのちを癒してください。

貧しい人々と地球とを犠牲にし、利益だけを求める人々の、心に触れてください。

正義と愛と平和のために力を尽くす私たちを、どうか勇気づけてください。」

ご清聴ありがとうございました。

(にしはら れんた 本学大学院キリスト教学研究科教授)